

**編集後記**：読者の皆さんは、「天気」に「今月のひまわり画像」という1ページだけの記事があるのをご存じでしょうか？ 同記事は、2004年3月号に「今月の衛星画像」という名前で誌上に登場して以来、タイトルを変えつつ、気象庁の有志の方々により書き継がれているものです。その内容は、気象衛星ひまわりが観測した特徴的な大気現象について、その画像を紹介するとともに、短い解説を加えるというものです。取り上げる事例は、執筆・編集の都合上、2ヶ月前の現象になってしまうのですが、世情を賑わしたものと、ちょうど振り返るのによいタイミングかなとも思われます。また、定期的に執筆していただく方の「趣味」と「嗜好」が想像できる場合もあり、楽しい記事になっております。ちなみに一番最初の記事では、2004年1月に日本海の帯状対流雲が解説されており、当時の気象衛星は米国から借用していたGOES-9でした。爾来、気象衛星もひまわり6号(MTSAT-1R)、7号(MTSAT-2)と引き継がれてきたのは、皆様もご存じの通りです。

さてそのひまわりですが、順調に進めばこの「天気」がお手元に届く頃には、新しい8号が種子島より打ち上げられているはずです。ひまわり8号は、来年中には運用を開始し、水平分解能は従来の倍、観測バンド数は16、全球画像は10分毎、日本域画像は2.5分毎に観測というものすごいデータを提供してくれるは

ずです。従来の気象衛星画像は1時間から30分毎の観測頻度であり、また、バンド数・水平分解能も定量的な物理量にして議論するにはもの足りないところがあつたことは否めません。一方で、これまで地球観測衛星や極軌道気象衛星の可視・赤外観測データを利用して、雲や大気に関する情報が抽出され、気候研究等に利用されてきました。ひまわり8号、さらに僚機である9号の観測データにそれらの知見を応用すれば、10分あるいは2.5分毎の雲などの変化が詳細に追えることとなります。従来のレーダーを主に利用したレーダー気象学は、いわば「メソ雨気象学」でした。ひまわり8・9号により、「メソ雲気象学」（あるいはメソ衛星気象学でしょうか？）の扉が開かれることになるかと信じております。当然その先には、雲の生成から降雨の終焉までを、レーダーと衛星の観測データを用いて一体的に扱う時代がくると思われます。

「今月のひまわり画像」に話を戻しますと、観測頻度が増える以上、短い時間スケールでの大気現象や、現象の立ち上がりが見えやすくなるはずですが、ひまわり8・9号の観測データを利用して、もっと興味深い現象を同記事でも掘り起こしていただけるようになることを祈念しつつ、小職は本業である気象衛星センターの業務に従事させていただきます。

(別所康太郎)